

イニシアティブに 取り組んで ①

「望まれる大学院でありうるのか」

栗岡幹英

博士後期課程 社会生活環境学専攻長



奈良女子大学は小規模ですが、大学院の比重の高い大学です。そのため、意欲の高い大学院志願者を見出すことは、人間文化研究科のみならず大学全体にとっても大きな課題です。最近、私たち文系の大学院講座では、内部からの進学者を見出すことがかなり困難になりました。他方、留学生と社会人の積極性が、大学院を活性化しています。

もちろん、進学して知的探求の道を選ぶ学部学生が減少するというこの状況は、一人本学に限定されたものではなく、全国で生じていることです。ただ、その影響はいわゆる「弱小」の大学院から被らざるを得ません。本学のように小規模な、かつ大都市の中心部からやや離れた大学には、厳しい状況と言えるでしょう。

そのなかで研究を志して進学する学生には、立場は異なっても、それぞれに志があるはずで、私たち受け入れ側は、その志に十分応えることが必要です。そのためには、私たち自身が、小規模とはいえ志のある大学院を作らなければなりません。女性が研究者として生きてゆく道筋をどう描き、どう支援するかが問われています。その多様なヴィジョンを教員や学生がそれぞれに実践している、そんな大学院を作りたいと考えています。

イニシアティブに 取り組んで ②

「JABEEとイニシアティブ」

増井正哉

博士前期課程 住環境学専攻長



学部・住環境学専攻（現在の住環境学科）では、おとし、JABEE（日本技術者教育認定機構）の認定を受けました。専攻（学科）の教育プログラムが国際的に通用する技術者教育プログラムとして認められたこととなります。JABEEが求めるのは①学習・教育目標（知識・能力）②学習・教育の量（総学習保証時間）、③教育手段（入試・科目編成・成績評価法など）・教育組織（教員評価法など）、④教育環境、⑤目標達成の評価と証明、⑥教育改善です。イニシアティブとかなり似通った作業内容もあり、また、世話役をされている先生方のご苦勞は別として、教員個々の作業量がJABEEにくらべて少ないこともあって、前期・住環境学専攻の教員は、すんなりとイニシアティブに取り組めたのではないのでしょうか。ただ、JABEEとイニシアティブのちがいは、JABEEが必要条件のクリアをめざすもの、いわば教育プログラムのデューティーであるのにたいして、イニシアティブはよりよい大学院教育のための継続的なしくみづくりです。学生諸姉が主体的に参加していることも大きな特徴です。その意味で、学生・教員にとってイニシアティブは、いろいろなアイデアも盛り込みながら、魅力的な大学院教育を自ら描く楽しみがあるといえるでしょう。



イニシアティブ関連新規開講科目の紹介

インターンシップは2科目あり、鍛冶先生と中山で担当しています。鍛冶先生担当科目は企業見学で、中山担当科目は企業実習です。ここでは中山担当科目を紹介します。

最近、就職したもののすぐにやめる学生が増えています。理由は様々ですが、イメージしていた仕事と違ったという理由が少なくありません。インターンシップでは社員の方と一緒に仕事をし、その業界の仕事内容を学ぶのが大きな目的です。そのため、企業もいいところだけ見せるのではなく、できるだけ普段着の業界を体験させるように工夫しているはずです。

授業の流れは以下のようになっています。4月に履修登録を行い、

2007年8月20日～31日の2週間、インターンシップ実習生として奈良県庁都市計画課で多くのことを学びました。

最初に、県庁の業務・組織構成や都市計画課の業務説明を受け、そして都市計画の制度やまちづくりの手法などについても丁寧に教えて頂きました。

また、県庁都市計画課の実習では課題を与えられ、2週間でまとめて最終日には成果発表をしました。実習先からの一方的なものではなく実習生側からも、この2週間で得た知識を基に、実際に奈良県で計画が進められている地域について提案するというものです。私達は「大宮通り改善計画案」について取り組みました。

そのほか、JRの連立事業実地研修や馬見丘陵公園研修など現地見

私の研究

私は中国都市部における働く母親の育児問題について研究しています。社会変容の影響を受けて、近年、中国、特に都市部の子育て環境は変わってきました。社会が都市化していく中で、働く母親が仕事をしながら実際にどのような育児をするのか、また、どのような育児支援を得ているのか。仕事と育児を両立させる上で、従来の支援には現実と対応していないものがあるのではないか。その結果、母親は具体的にどのような問題に直面しているのか。以上のようなことに関心を持って、自分の研究を進めています。

私は仕事と育児の両立における現在の子育ての方法と問題点を中心に、働く母親にインタビュー調査を行いました。調査の結果、新

「インターンシップ実習」

中山 徹

社会生活環境学専攻 生活環境計画学講座准教授

5月に実習先企業を決めます。大学が用意する企業リストから選ぶか、自分で実習先を探してきます。7月にはいると実習先企業を訪問して、実習内容等の打ち合わせを行います。実習は8月か9月の夏期休業中に行います。実習期間は2週間、時間は実習先企業の勤務時間にあわせます。実習修了後、レポートをまとめて提出します。

平成19年度、実習を希望した大学院生は全員、実習先に行政を希望しました。そのため、行政担当の教員(今井先生) 指導のもとで、実習先行政を決め、打ち合わせを行い、無事インターンシップを終えることができました。

「インターンシップ実習」に参加して

東田優子

博士前期課程 住環境学専攻1回生

学もスケジュールに組み込まれていました。JR連立事業実地研修ではJR奈良駅周辺で工事中の線路内に実際に立入っての見学となりました。連結部分の様子など間近に見ることができ、良い体験になりました。馬見丘陵公園では、薔薇の剪定、公園計画実習、公園橋下部工事現場実習などを行いました。屋外での実習が多く良い気分転換になりました。

この2週間で様々な専門分野の方々と出会い、お話することができ、他では味わう事のできない貴重な経験ができたと思います。内容の濃い充実した時間を過ごすことができました。今回の実習で得た多くの事を今後活かしていきたいと思っています。

「中国都市部における働く母親の育児問題」

徐 倩

博士前期課程 国際社会文化学専攻2回生



たな発見、特に興味深い知見が得られました。修士論文では育児支援に焦点を絞って、母親の仕事と育児の両立の実態と問題点を考察し、変わっていく社会環境の中で、どんな支援が必要なのかを考えたいと思っています。

また、私は自らの視野を広げ、新たな発見をするため、積極的に各国の女性と児童に関するセミナーやフォーラムに参加しています。修士課程修了後は博士後期課程に進学し、中国の子育て支援を中心に研究を深めていきたいと思っています。将来的には、大学院での研究を生かし、女性と児童に関する仕事に携わっていくことが私の希望です。

イニシアティブ関連新規開講科目の紹介

研究職への就職や研究資金の獲得には、自らの研究が当該専門分野でいかにオリジナリティがあり、有効な知見を提供するものかを効果的に示すことが必要です。本演習では、研究職や研究助成への応募書類作成方法を実践的に学ぶことを目標の一つにしています。

昨年度の授業では、日本学術振興会特別研究員への応募申請書の作成を課題としました。担当教員（瀬渡・吉田）は特別研究員への応募経験がないため、かわりに、これまでそれぞれが応募・採択された科学研究費補助金の申請書類を参考に示して、書類作成のノウハウを概説しました。たとえば、文字の大きさ、読みやすい文章、図や写真の使用などの書類作成の初歩的アドバイスをした後、研究

「研究プロポーザル演習」

吉田容子

社会生活環境学専攻 社会・地域学講座准教授



目標や研究計画がわかりやすく簡潔に書かれているかを担当教員で検討し、最後に講評を行いました。しかし、担当教員とは専門が異なる受講生の研究の詳細にまで踏み込んでアドバイスするには限界があります。この点は、それぞれご指導の先生方にフォローしていただく必要があると痛感しています。

また、本学大学院を修了し研究職に就いている方をゲストスピーカーにお招きしました。大学院での研究生生活、就職・研究助成獲得にあたっての経験談、家庭と研究とのほごまでの葛藤など、女性研究者の立場からいろいろ語っていただき、受講生には好評でした。

「研究プロポーザル演習」に参加して

吉川紗代

博士後期課程 社会生活環境学専攻2回生

この授業で特に印象に残ったのは、学術振興特別研究員PDの経験をお持ちで、現在研究職について活躍しておられる筒井由起乃先生のお話でした。筒井先生はご自身の経験から、研究者になるための秘訣について多くの示唆を与えて下さいました。

研究テーマは狭く限定してしまわず、自分の置かれた状況に応じて臨機応変に広げていくことや、わかりやすいテーマから取り組むこと。また3つの「C」として、チャンス（Chance）を生かすために、学会や研究会で発表すること、院生間の交流、年1本は論文を書くことや、語学やパソコンのスキルを磨くことなど、多くのチャレンジ（Challenge）と、長年の研究の継続（Continue）が研究者に

とって重要であることをご教示下さいました。

申請書の書き方についても、丁寧に書くこと、ビジョンは大きく、しかし具体的に書くこと、レイアウトは見やすく、フォントを調節すること、金額は少額からアタックすることなどを教えていただきました。この書き方は、学術振興特別研究員だけではなく、助成金の申請や研究計画書の書き方にも応用できます。研究助成金は理系ではよくあることだろうけれど、文系だからと今まで考えもしなかったのですが、私も今後、何かの研究員や研究助成金申請に挑戦してみようという気持ちになりました。この授業はとても有意義な内容で、ぜひ今後の研究生生活に役立てたいと思います。

私の研究

「韓国における育児援助ネットワーク」

崔 廷臣

博士後期課程 社会生活環境学専攻3回生



私は韓国における育児サポートシステムの構築に向けて、育児援助ネットワークを中心に研究をしています。韓国は人口抑制政策のひとつである「家族計画事業」を1962年に採択し、その後急速な少子化を遂げ、2006年には少子化の指標となる合計特殊出生率が1.13と、世界諸国のなかでも超低出生社会です。さらに、1960年代から始まった産業化と都市化に伴い、夫婦と未婚の子どもが中心となる核家族化が進んでおり、その時期の子ども世代が現在の育児を担う親になっています。少ないきょうだい数のなかで生まれ、自分が育つ過程の子どもが生まれ育つさまを経験せず、自分自身の育児において

もサポート源として動員しうる親族が少なくなっています。特に、母親がもっぱら育児を受けもっている韓国においては、育児を行う母親が孤立の危険に立たされる可能性が高くなっており、育児は母親だけではなく、社会全体の問題であるという認識が広がりつつあります。したがって、育児において母親の責任を強調する韓国においては、育児問題を家族外の社会的関係との関連でとらえる視点をもつ育児援助ネットワークを把握することは、最も重要であると思います。





倉吉は山陰の中核都市として栄え、人口は約5万人で町並み、白壁土蔵群や自然が江戸時代から脈々と残っています。しかし郊外の大型店によって中心地の商店街が廃れてきました。まちづくり会社「赤瓦」は、平成4年から滋賀県長浜市の(株)黒壁に何度も視察に訪れ、様々なヒントを得て平成9年に設立されたものです。自分たちでお金集めをし、周囲にある4つの温泉への年間200万人の観光客に目をつけ、生活文化の漂うまちづくりを開始しました。この結果、最近の日経新聞の統計では、「行ってみたい蔵の町」として5位、「団塊の世代が行ってみたい町」として3位となり、時がゆっくりと過ぎ



ライフストーリー/ライフヒストリー研究を中心とした質的研究法について、心理学的視点、社会学的視点からのアプローチの方法を学ぶことを目的とし、大阪府立大学から田垣正晋先生を講師にむかえ、「障害者の心理社会的問題への質的研究の現状と課題：質的研究、成熟期を迎えて」について発表をいただきました。

また、田垣先生ご自身の博士論文の構成、章立て、研究方法などをもとに、質的研究の現状と課題について 1. これまでの研究の概要 2. 質的研究の方向性（何を障害としていくのか：既存のカテゴリーをくつがえすには） 3. 質的研究の方向性（プロセスの研究における認識の変容） 4. 質的研究の方向性（社会学、心理学、社会福祉学の



「EQ 心の知能指数を知っていますかー充実した大学院生活のためのヒントとコツー」

小川伸彦

社会生活環境学専攻 社会・地域学講座准教授

将来への不安等から悩みを抱えやすい時期にある大学院生が、心身の健全さを維持しながら無理なく向上してゆくにはどうすればよいでしょうか。豊田直子氏（ホリスティックコミュニケーション研究所 代表、臨床心理士）を講師に迎え、セミナー形式の講演会を開催（主催：大学院前期課程人間行動科学専攻スポーツ科学コース）しました。

キーワードである心の知能指数（EQ）とは、「自分の本当の気持ちを自覚し尊重して、心から納得できる決断を下す能力」のことです。ストレスの原因になるような感情を制御し、楽観を捨てず、他人と共感し、協力しあうための5つの能力（＝自己認識／自己管

理／対人理解／対人スキル／モチベーション）からなります。この能力を向上させるには、特に「自己理解」が重要ですが、多くの人はこの作業を苦手としています。

そこで本研修では、理論的な理解に加え、ワークシートに記入したり出席者同士が話し合ったりして、実際に自己認識を深める方法が示されました。冒頭に、ペアワークによって身体と気持ちをほぐす時間も設定され、主体的に参加できる和やかな雰囲気での会でした。日 時：2007年1月29日（月）16：30～18：00 於：本学本部棟3階第1会議室

参加者：講師1名、本学院生20名、教員等7名、計28名

大学院生の自主企画研究セミナーⅠ

「山陰、倉吉のまちおこし 12年の軌跡ー白壁土蔵を活用した赤瓦での歩み」

柳井妙子

博士後期課程 社会生活環境学専攻2回生

るようなまちづくりが行われています。今回は、(株)まちづくり「赤瓦」の里見泰男常務取締役を講師に迎え、倉吉がもっている生活に密着した自然、文化、歴史を活かしたまちづくりについての話を伺いました。

日 時：2007年2月2日（金）14：00～15：30 於：本学大学院会議室
参加者：講演者1名、本学教員3名、本学院生・学部生5名、学外者19名、計28名

大学院生の自主企画研究セミナーⅡ

「質的研究への視座」

山本智子

博士後期課程 社会生活環境学専攻2回生

各ディシプリンにおける質的研究の独自性を出すべきか、否か）が議論されました。

田垣先生の発表に対する指定討論として、本学教員である栗岡幹英先生による社会学的視点からの議論の提示も行われ、フロアも交えて活発な討論となりました。

日 時：2007年2月9日（土）14：00～17：00 於：本学生活環境学部
中会議室
参加者：講演者1名、本学教員4名、本学院生・学部生16名、学外者2名、計23名

FD研究交流シンポジウム

「EQ 心の知能指数を知っていますかー充実した大学院生活のためのヒントとコツー」

小川伸彦

社会生活環境学専攻 社会・地域学講座准教授

学生への 研究支援

本プログラムでは、研究成果公開援助や自主企画による研究セミナー企画援助など、今年度も多くの研究支援が行われています。その中から新規事業について紹介します。

◇学会大会参加費助成：学会大会で発表した場合の大会参加費助成

◇国際的な研究セミナー開催助成：海外から研究者を本学に招いた研究セミナーや、学生が海外に渡航し、現地で開催する研究セミナーの助成

◇国際的FD視察交流研修助成：海外での先進的取り組みの情報収集・研修並びに研修成果に基づくFD報告会の開催助成

※ 活動内容は次号以降で報告します。詳細は、ホームページ <http://www.nara-wu.ac.jp/initiative-life/information.html> をご参照下さい。